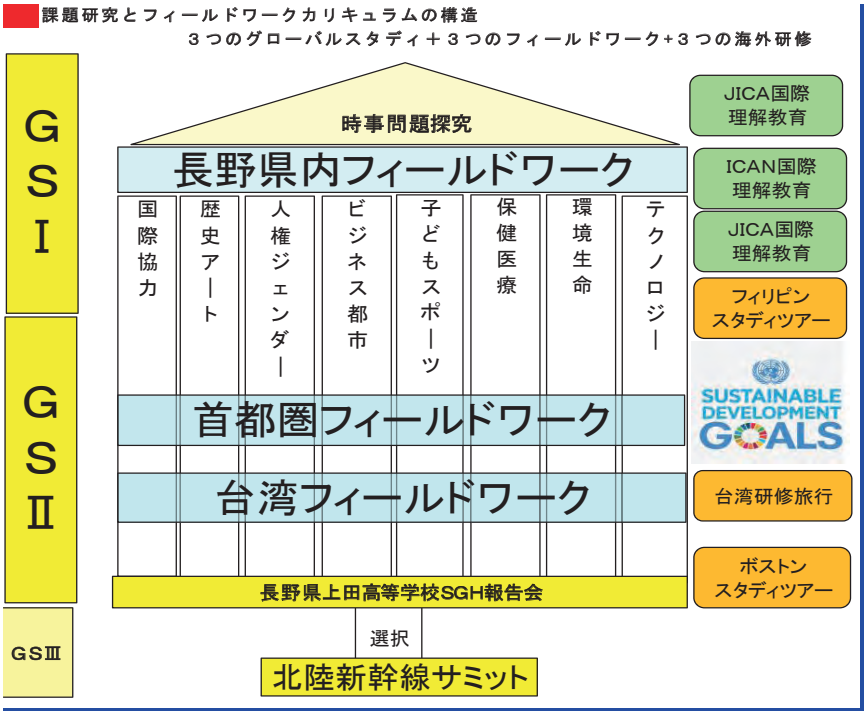
長野県上田高等学校

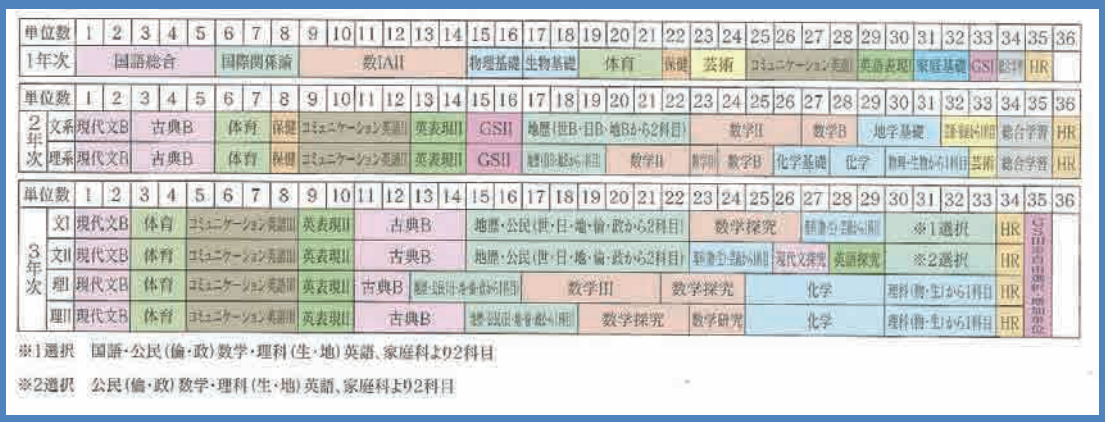
長寿県 NAGANO から世界のいのち・健康を支えるグローバルリーダーの育成

【構想の概要】

３つのグローバルスタディ（GSⅠ、GSⅡ、GSⅢ）、３つのフィールドワーク（県内、首都圏、台湾）、３つの海外研修（フィリピン、台湾、ボストン）を軸として、プレゼンテーションやディスカッションの機会を多くおりまぜた探究活動、課題研究、国際交流活動に取り組む本校では、長寿県 NAGANO から世界のいのち・健康を支えるグローバルリーダーの育成を目指している。



（本校の教育課程表）



学校設定教科「ＳＧＨ」

本校の教育課程におけるＳＧＨ活動の柱となるのは、学校設定教科「ＳＧＨ」で、各学年に学校設定科目グローバルスタディ（以下「ＧＳ」と略）を設置する。1、2 年次での必修 3 単位と 3 年次自由選択の 1 単位となる。以下にそれぞれの概要を提示する。

ＧＳⅠ（1 年次必修、1 単位）

グローバル課題を題材としてレポートのまとめる力とＩＣＴスキルを身につけ、県内フィールドワークにより、自らのキャリアプランを通して協働力を養成する。自らの設定した課題に沿って、課題研究を個人研究として開始し探究力を養う。

ＧＳⅡ（日本語と英語、2 年次必修、2 単位）

（日本語）ＧＳⅠで課題設定した内容をさらに探究し、課題解決型提言ができる 21 世紀型スキルを身につける。首都圏フィールドワークでは、研究課題について発表し、専門家より指導を受ける。さらに、台湾フィールドワークを経て、課題研究発表会では全員ポスターセッションを行う。

（英語）ＧＳⅠで課題設定した内容を英語で探究し、課題解決型提言ができる英語コミュニケーションスキルを身につける。台湾研修旅行により、課題を発信し、現地高校生とカテゴリー別に英語ディスカッションをする。帰国後その成果についてディベートを実施する。

ＧＳⅢ（3 年次自由選択、1 単位）

ＳＧＨ全員カリキュラム（ＧＳⅠⅡ）で実施した課題研究をキャリアに応じて更に深化させる。課題解決のアクションプランを地域で考案するため、地域で自主的にフィールドワークを実施し、論文を作成する。6 月には北陸新幹線サミットを主催し、他県のＳＧＨ高校生らと課題研究をカテゴリー別にプレゼンテーションし、ディスカッションする。

ＧＳⅢの授業は、英語部門を水曜日、日本語部門を木曜日の放課後にそれぞれ実施する。4 月中に課題研究の計画を提出させ、以後各自の計画に基づいて調べ学習やフィールドワークを実施する。フィールドワーク先は企業、医療機関、官公署など、自らの問題意識に基づいて設定し、基本は自分でアプローチする。

北陸新幹線サミット開催までの経緯

平成 26 年度、アソシエイト校時代に先進校を視察した係職員が感じたのは、「もっと生徒にプレゼンテーションの機会を与えたい」、「多くの生徒のプレゼンテーションに接して切磋琢磨される機会を作りたい」、「指導者間の研究交流の場を作りたい」「大学も近隣に少なく、専門家の指導を仰ぐ機会が少ない」といった思いだった。それを補うため 1、2 年次のＧＳでも個人レベル、グループレベルでプレゼンテーションの機会を多くとるよう心がけている。ＧＳⅠでもⅡでも年間最低 1 回はプレゼンテーションを行い、2 年次 2 月の「ＳＧＨ報告会」では、2 年生全員が 1 日がかりでポスターセッションを行うようにした。

ＧＳⅢ選択者については平成 29 年度 10 名、同 30 年度 14 名で、自らが発表者となり、かつスタッフとなれば、そこでさまざまな成長の機会となる…、そんな思いから一大プレゼンテーション大会の構想が浮上した。その実現のため係職員は筑波大学附属坂戸高校主催の「ＳＧＨ校生徒成果発表会」や「ＳＧＨ甲子園」などへの参加を通じて他校職員との交流を深め、その一方で、長野県内の同様の悩みを抱えるＳＳＨ校、ＳＰＨ校にも声をかけた。

思えば北陸新幹線は東京から金沢までが 228㎞で、その中間地点は長野だが、駅の数で数えると上田がほぼ中間地点となる。首都圏や北陸地方のＳＧＨ校、さらには県内のＳＳＨ校、ＳＰＨ校が初夏の信州上田に集結するならば…そんな思いで準備に努め、平成 29 年 6 月に第 1 回北陸新幹線サミットが開催された。第 1 回参加校は下記のとおりだった。（第 2 回もほぼ同様）。

（県外）福島県立ふたば未来学園、筑波大学附属坂戸、東京学芸大学附属国際中等教育学校、新潟県立国際情報、石川県立金沢泉丘、石川県立七尾
（長野県内）飯山、長野、屋代、諏訪清陵、諏訪実業、上田

北陸新幹線サミットの概要

分科会は以下の 4 つを設置した。

Ⅰ　信州発いのち・健康フォーラム

テーマ：世界の人々のいのち・健康を守る

保健、医療、衛生、福祉、栄養、健康、寿命などの分野で、保健・医療・寿命に関する課題研究テーマ

Ⅱ　地域の課題から地域創生を提言

テーマ：高校生から発信する地方創生～地域と町づくり

地域創生、教育、生態系、経済ビジネス、起業ＣＳＲ、観光、食と農業、資源、防災復興などの分野で、地域の課題解決に関する課題研究テーマ

Ⅲ　グローバル課題から解決策を提言（日本語）

テーマ：課題解決～グローバル課題を考える（日本語）

多文化共生、哲学、宗教、芸術、法と人権、ジェンダー、外交、安全保障、平和、貧困、国際協力、国際開発、持続可能な発展などの分野で、グローバル課題に関する課題研究テーマ

Ⅳ　グローバル課題から解決策を提言（英語）

（内容はⅢと同様：使用言語がすべて英語）

助言者にも、地域医療で全国的にも注目される佐久総合病院の医師や地域のＮＰＯ活動家、本校と連携関係にあるＪＩＣＡの職員、本校と連携関係にある東京外国語大学の学生など、地方のこうした大会としては重厚な布陣を敷いたものと自負している。ＧＳⅢ選択生徒には自らのプレゼンテーション発表以外にも会場設営や遠方からの来客の案内などの仕事を任せた。また司会進行役などは未来のＧＳⅢ選択者として 1、2 年生徒から希望者を募った。

各分科会では基本的には 6 人のプレゼンターが出場して、8 分間のプレゼンテーション、2 分間の質疑応答後、10 人程度のグループに分かれて 8 分間のディスカッションを行った。最後の全体会では、分科会ごとに選ばれた代表者から数分間の報告をしてもらい、成果を共有することとした。

（ 写真：SGH 運営指導委員大井恭子先生による記念講演 ）

（写真：分科会でのディスカッション）

準備段階、運営上の試練

もちろん、準備段階、運営面での悩みは尽きない。遠方から本当に参加してくれるのか？プレゼンテーションの希望数が多すぎたらどうするのか？少なすぎたらどうするのか？……

結果的に、旅費も昼食も出せないのにもかかわらず、今年度も県外から多くの学校が参加してくれ、本校ＧＳⅢ選択者の分と併せ、ほぼ昨年度並みのプレゼン数 33 がそろった。また、校外からの参加生徒数は 70 名となり、昨年度よりも 10 名以上増加した。

ＳＧＨ予算に限りがあるなか、助言者をどのように確保するのかも課題だったが、今年度はＯＢ、ＯＧ学生や管理機関の指導的立場の方々がよろこんで講師を引き受けて下さった。

また、昨年度のＪＩＣＡ駒ヶ根に続いて、今年度は「北陸新幹線サミット」の名に相応しく、ＪＲ東日本長野支社の後援を得ることにも成功した。上田駅長さんからの「お土産」に頬をゆるめた高校生の表情が忘れられない。

（写真：上田城跡公園での昼食風景）

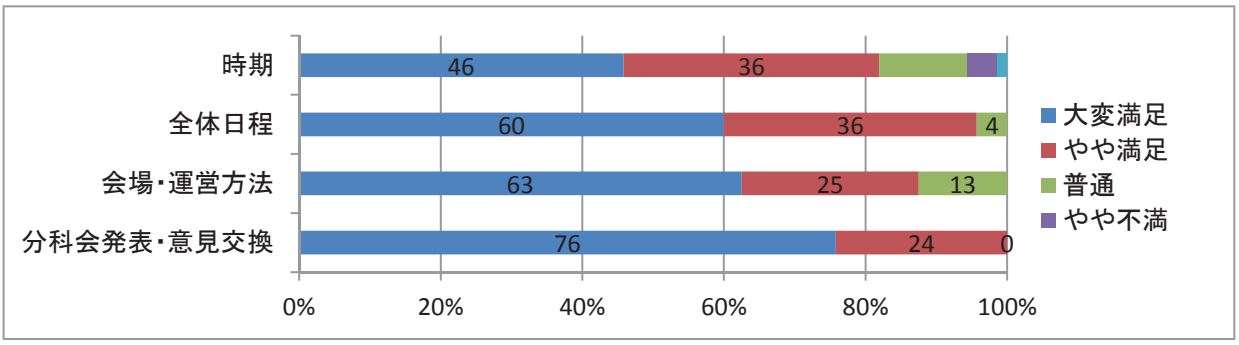
評価

実施後の生徒アンケートのまとめは図のとおりである。開催時期や当日の日程よりも、分科会の発表・討論に対する満足感が高かったことに注目したい。その点で「新幹線がつなぐ高校生間の切磋琢磨」という目的は達せられたと思われる。「講師の先生のアドバイスがとても参考になった」、「同じ日本国内でも自分とは異なる環境で生活している人たちの意見は新しい見方をもたらしてくれて、聞いていて楽しかった」といった声はそれを物語るものである。もちろん「もっと討論の時間を増やしたほうが良い」など、運営面に関する要望もあった。今後の検討課題としたい。今年度は、地域創生に関する分科会に参加希望者が多く２分割して実施した。なお、昨年度「スクリーンが見えづらかった」との意見が多かったが今年度は全教室に電子黒板が設置されてこちらを使用できたため、この問題は解決された。他校からの引率者からは「一人ひとりの生徒が活き活きと責任感を持って業務にあたっていた」といった声が寄せられ、生徒主体の運営は概ね好評を得た。

今後の展望

今後もこの取り組みを続け、新幹線がつなぐ域内連携に努めたい。その際の検討課題として、文字通り北陸新幹線が繋ぐ地域の共通課題（例：道州制、北陸新幹線や、その開通に付随してＪＲから切り離された線路と地域の関係テーマの課題研究）の共同研究があげられよう。

長野市から上田市にかけての地域は、戦国時代の名将がしのぎを削った激戦地が散在するとともに、フォッサマグナも近く、正月料理における「サケ文化圏」と「ブリ文化圏」の混在地でもある。日本海と太平洋、西日本と東日本の境界線としてのこの地で、各地の高校生がプレゼンテーションにしのぎを削るこの大会を今後も大切にしていきたい。



図：終了後に高校生に対して実施したアンケートのまとめ